



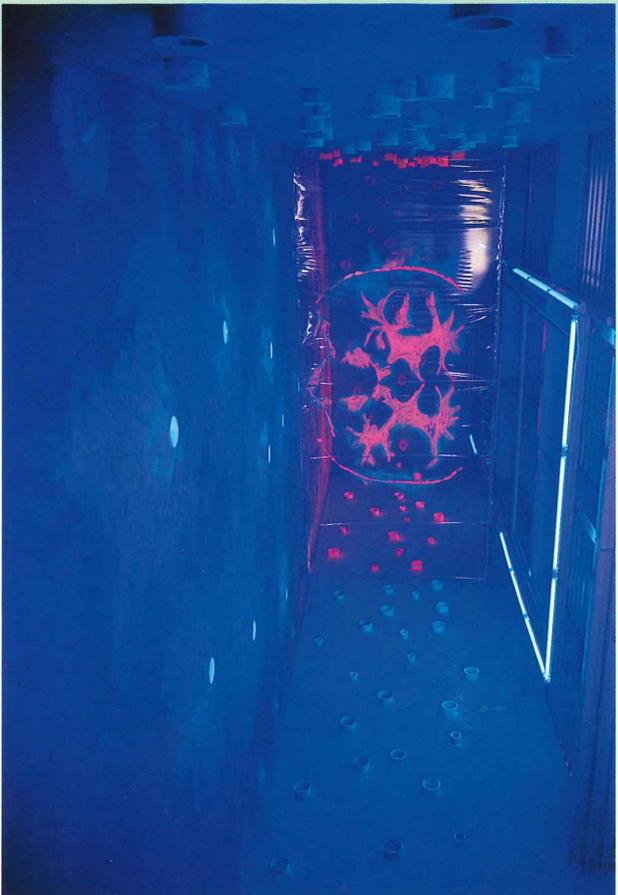
—— 古来、わが国では生け花のような独自の文化を創造してきたように、自然と人間が共に生きるものとしてとらえられてきました。しかし今日では、一方でバイオ・テクノロジー等の生命科学の進歩にともない、生命操作が現実のものとなっており、また脳死問題のように我々が自分の生存と進化を決定するかの様な環境になってきています。そのような中で、現実の動・植物などとの関係も新たな位相のものへと変わってきているようにおもわれます。

今日、世に植物や微生物等を契機にした様々の表現が現れています。ここでは、リリアナイカ希薄になり、生物の有り様が曖昧になっているなかで、植物等を用いた表現には表層的なノスタルジーや原始への回帰、あるいはエコロジー—的な視点のものも多く目にします。しかし、他方では単なる慰藉籍としての場としての生命回歸ではなく、そのような現代のテクノロジー—環境と積極的に切結んだ、これまでとは異なる表現がかんかんえられています。身体といわれわれの内部のもう一つの神秘世界も含めた、生命への新たな思索は、今日の大きな表現の糸口として見つめられているのです。

植物の人の反応を、デジタル的信号に変え、音として創出する銅金裕司(エコロジカル・フランクローズ)。有機も無機も曖昧な生命の起源的場に立ち至る(muon/足立 涼子・手島 莊子)。あるいは独自の視点から生命への関心を一貫して示し、作品に内在化させる王 新平。またカール・シムズ、トーマス・レイなどの生物学の探究の中では、人工生命がコンピュータ上のシミュレーションの中で生成し、突然変異をおこし、種は増殖します。

もうひとつの同じ時空を静かに生きる存在として動・植物は存在し、いまもわれわれに生命にかなう、ある本質的な示唆を与えてくれています。植物等を問うこととは、生命の再定義ともかわる、われわれの生命の意識とリアルに直結することなのです。

本展では、このような現代の生命科学をふまえたアート作品に、人工生命の成果を併置して展示することで、現代における表現の問題を総体として考えようとするものです。



【参考写真】 王 新平 《惑星環繞の染色変移—足跡》 1994



muon 《温泉—代謝する硫黄— Sulphurous Spring-Distorting Soap》 1996



三上明子 《Molecular Clinic 1.0》 1995



カール・シムズ 《Panspermia》 1990



朝品川文化振興事業団

【交通】 JR山手線大塚駅(東口)下車徒歩10分  
東急バス(大井町)→渋谷駅 大塚駅下車徒歩10分  
【駐車場】 美術館専用駐車場はございません。  
お車でご来館の場合は、大塚ニューシティ  
地下2階の駐車場(有料)をご利用下さい。

東京都品川区大塚1-6-2  
大塚ニューシティ2号館  
TEL.3495-4040